

セコムが提案する EBM

第7回

社会医療法人仙養会北摂総合病院(大阪府高槻市)

「セコムSMASH」使用頻度全国No.1!!
データの背景まで含めた分析を提示して
現場の信頼を獲得、迅速な対策にも寄与

関塚 永一

セコム医療システム株式会社顧問
 国立病院機構埼玉病院名誉院長
 慶應義塾大学医学部客員教授

大阪と京都のベッドタウンとして発展した高槻市の地域医療を支え、「VERY BEST HOSPITAL」をめざす中核病院・社会医療法人仙養会北摂総合病院。その機能に磨きをかけるべく、現状に関する深掘りした分析とそれに基づいて打つ「次の一手」で、着実にその足場を固めつつある。

社会医療法人仙養会北摂総合病院

大阪・京都のベッドタウンとして発展、35万人が暮らす都市の中核病院として機能している。1965年の創立以来、診療機能の向上と専門診療の充実、および地域連携機能の強化と在宅医療支援に取り組み。早くからQCサークルに取り組み。地域医療支援病院、大阪府がん診療拠点病院、基幹型臨床研修病院。



所在地: 大阪府高槻市北柳川町6-24
 電話: 072-696-2121
 病床数: 217床(一般病床203床、集中治療室14床)
 職員数: 544人(常勤医55人、常勤看護師212人)

データの背景を示し 経営層・診療科も注目

北摂総合病院が「セコムSMASH」を導入したのは2019年4月のことだ。それまでもDPC分析ソフトを用いた経営分析システムはあったが、使いづらく、経営層の反応も今一つだったという。そこへ、経営分析を担い、経営層にデータを提出する役目を務めることになった池田健士経営企画室長(当時は情報企画室長)が「うまく活用できないシステムにお金を

かけ続けるより、もつと活用できそうなシステムにお金を使おう」と提言、新システムを導入することになった。

検討を進めるなか、「セコムSMASH」は診療月ごとの入院医業収益や在院延べ日数等の経営指標を出すだけでなく、症例ごと、手術手技ごとの動向や疾患構成の変化といった背景にも踏み込んだ分析が容易に行える点が評価された。坂部博志事務局長は「資料を示せば、病院長や診療部長から根拠を問われますが、裏付けやその分析

も提示することで、私たちの提案への姿勢も変わります」と語る。

現在、主に「セコムSMASH」で示すデータを提示しているのは毎週1回開かれる経営幹部会と、その翌週の診療部長会の2つだ。経営幹部会は病院の意思決定の場で、理事長、病院長、副院長、病院長補佐、看護部長、坂部局長、池田室長が参加している。副院長、病院長補佐には、同院の主要診療科である消化器内科、循環器科、一般消化器外科、整形外科の責任者が就いている。経営と医療現場

の一体的運営がうかがえる。

診療部長会は主要診療科以外の診療科の医師にも、各診療科の経営状況を伝えるべく設けられたものだ。経営幹部会で提示するデータが「全体像」を示すのに対し、こちらではそれぞれの診療科の動向が示され、より具体的な対策を検討する。

「セコムSMASH」の ユーザー

ているのが入院収益の動向とその背景を分析する「入院クエリ」、病棟患者の重症度、医療・看護必要度(Hファイル)、そして外来収益の動向を分析する「外来クエリ」だ。DPC以外のデータも踏まえて分析、傾向を提示できるのが「セコムSMASH」の特徴の一つだが、これを存分に活用しているのだ。実際、同院の入院クエリ使用頻度はユーザー病院のなかでも突出して多い。坂部局長と池田室長の席が近く、折に触れて現状を分析、議論しているとのことだった。

経営分析が日常的に行われているという。

使い勝手のよさもあると思う。私が国立病院機構埼玉病院の院長だった際、導入当初はスタッフにデータを出力してもらっていたが、「セコムSMASH」は操作が簡単なのでだんだん興味が湧いて、自分でマウスを動かして分析できるようになった。起きている現象を示すデータの背後にある要因まで深掘りできるから、なおさら興味をかき立てられる。

さらに北摂総合病院の場合、そのデータの更新頻度は「毎日」という。毎日夜11時にその日のDPCデータを取り込む仕組みになっており、翌朝、池田室長がパソコンを開くと更新されたデータを閲覧できる。つまり、2日前の状況を反映したデータに基づいた分析が可能になるわけだ。

リアルタイムのデータで 対策も迅速に講じる

毎週、経営幹部会と診療部長会が開かれ、かつそこに示される資

料はほぼリアルタイム。こうなると「対策」も早い。20年4〜5月にコロナ禍で患者数が落ち込んだ際はさまざまな手立てを講じたが、医師の全面的な協力のもとで進められたようだ。特に内科系は落ち込みが目立ったが、一丸となって取り組んだ結果、21年は19年とほぼ同じ水準に戻っている。

DPCのコーディング方法の見直しはその一例だ。ウイルス性腸炎と感染性腸炎では後者のほうが点数は高く、かつ抗生剤を処方しているにもかかわらず、「ウイルス性腸炎」と記載するケースがあった。資源病名への変更である。医師たちに意識してもらった。状況が改善する。私は院長時代、「レセプト点検」を日課にしてきたが、時折、コーディングがずさんな医師がいて閉口した。「医

事課からの確認事項には丁寧に応じてください」と伝えたものだが、こうした現場への働きかけも根拠をもつて進められる。

地域における中核病院としての足場固めにも役立っている。同院

は近隣に4つの大学病院、400床以上の病院が3つと、「競合」に事欠かないが、20年以上前から続けている地域連携が奏功し、地域の厚い信頼を得ている。協力医療機関となつている診療所は450以上。主な診療圏は15kmに及び、そのなかには大学病院よりも遠いところから通う患者もいるそうだ。まさに「信頼」のなせるわざと言えそうだが、池田室長は「今後10年、地域住民にどのような医療が提供できるか検討中です。「セコムSMASH」の人口動態予測や疾病別推計、患者予測を用いて戦略を練っています」と説明する。

21年4月に立ち上げた経営企画室は、情報企画室から衣替えしたかたちだが、従来は診療情報と経営情報の収集・分析を一手に引き受けたのに対し、経営企画室は経営情報に特化したそうだ。専門部署を立ち上げることで、過去のデータをまとめて示すだけでなく、それを分析し、次の一手を提案しようとしているのだ。同院のこれからの戦略に注目したい。



池田健士経営企画室長



坂部博志事務局長